

日本基督教団 八ヶ岳教会 平和を祈る主日礼拝 NO.1185 2021年8月15日

牧師	山本護	奏楽	山本恵美	第一部礼拝	司式	渡部敬子	9:30~10:30
	※讃美歌は二番までうたいます			第二部礼拝	司式	福田奈里子	11:00~12:00
前奏	黙想			祈禱			
讃美歌	7 主のみいつとみさかえとを			讃美歌	II-164	勝利をのぞみ	
祈禱				献金			
信仰告白	使徒信条 566			讃詠	547	いまささぐるそなえものを	
	日本基督教団 戦責告白			黙禱			
聖書	ホセア書 11:8			主の祈り	564		
	マタイによる福音書 5:6~9			頌栄	539	あめつちこぞりて	
讃美歌	420 世界のおさなる			祝禱			
説教	『平和をつくる憐れみの力』			後奏			

この頃「ベタ過ぎる」という言い方を耳にするが、含みのない真っ直ぐ調子を揶揄した表現らしい。本日の平和を祈る主日礼拝では、イエスの山上の説教から「ベタ過ぎる」御言葉に耳を傾けよう。

「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる(マタイ 5:9)」。日本語はこれで自然なのだが、「～するならば、幸い」と、あたかも条件付きのように誤読してしまう。直訳すれば「幸いだ、平和をつくる者たち」だ。どうだろう、ニュアンスが違うのではないか。「幸いだ、義に飢え渴く者たち(5:6)」、「幸いだ、憐れみ深い者たち(5:7)」、「幸いだ、心の清い者たち(5:8)」。くり返し口の中で唱えていると、それが道徳的な勧めなどではなく、イエスという人格(神の声)として焦点を結ぶ。

「幸いだ、平和をつくる者たち」。このように私たちは、イエスに励まされる。ああ、そうだった。「義に飢え渴いて」署名し、カンパをし、デモもした。イエスはそんな私たちに「君たちは幸いだ」と呼びかける。それでは「憐れみ深い」はどうか、「心の清い」はどうか。「そんな、とても自分にはその資格がありません」と言うだろうか。その通り、憐れみや清さの資格は、私たちには無い。

「イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、盲人たちはすぐ見えるようになり、イエスに従った(20:34)」。私たちは盲目だったが、イエスに「憐れみ」で触れられ、頑なな目が開かれ、キリスト者になった。イエスの憐れみが注がれて従ったが、私の能力や手柄や資格など、まるで関係ない。

「幸いだ、平和をつくる者たち」。「平和」とは単に戦争がない状態を言うのではない。ヘブライ語の「シャーローム／平和」の底流には、御国が到来する終りの日の完成が在る。すなわち、平和とは、救われて、完全に充足している状態のこと。また「幸い」という言葉にも「最高の幸福感」といった意味あいがあり、これも神から与えられる「祝福」とヘブライ的に解せよう。つまり「平和をつくる」教会としての働きは(5:9)、到来しつつある神の御業に「むかっていく」こと。ゆえに「幸い」なのだ。

「ああ、エフライムよ～イスラエルよ～わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる(ホセア 11:8)」。神の憐れみは激しい怒り(11:6~7)としても現われる。人間は折々神に背くが(11:2)、神の怒りの底には、愛が燃えている。「幸いだ、憐れみ深い者たち。彼らは憐れみを受けるだろう(マタイ 5:7)」。私たちが受ける憐れみは、穏やかで優しいとは限らない。激しく燃える愛であることも少なくない。

「獅子のようにほえる主に彼らは従う。主がその声をあげるとき、その子らは海のかなたから恐れつつやって来る(ホセア 11:10)」。なぜ神は怒り、吼えるのか。このうえなく私たちを愛し、気にしておられるがゆえに、迷い背く私たちを吼えて目覚めさせる。神が偉そうに泰然自若としていたら傲慢な人間は気づくまい。神の怒りに私たちはシュンとなって、どんなに遠くからでも御許に戻る(11:10)。

神の激しく燃える愛の中にあって、私たちは幾重にも憐れみを受ける(マタイ 5:7)。神の憐れみの力で、私たちは「平和をつくる(5:9)」。私たちの拙い働きを、イエスは「幸いだ、最高だ」と褒めてくれる。

私たちは盲目で道に迷っていた だからキリストに憐れみを注がれ 憐れみで世を観る事になった
憐れみには遠近法がない 海の彼方でも 過去の戦争にも反応する 憐れみはキリストの動的な力

平和を祈る主日礼拝では毎年、教団の「戦争責任告白」を唱えています。帝国政府の陰険な圧迫によるとはいえ、戦争に協力をした「教会」の責任を八ヶ岳教会でも感じたい。8/21(土)メダル・カフェ。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳伝道所」で検索して下さい。

第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白（戦責告白）

わたくしどもは、1966年10月、第14回教団総会において、教団創立25周年を記念いたしました。今やわたくしどもの真剣な課題は「明日の教団」であります。わたくしどもは、これを主題として、教団が日本及び世界の将来に対して負っている光栄ある責任について考え、また祈りました。

まさにこのときにおいてこそ、わたくしどもは、教団成立とそれにつづく戦時下に、教団の名において犯したあやまちを、今一度改めて自覚し、主のあわれみと隣人のゆるしを請い求めるものであります。

わが国の政府は、そのころ戦争遂行の必要から、諸宗教団体に統合と戦争への協力を、国策として要請いたしました。

明治初年の宣教開始以来、わが国のキリスト者の多くは、かねがね諸教派を解消して日本における一つの福音的教会を樹立したく願ってはおりましたが、当時の教会の指導者たちは、この政府の要請を契機に教会合同にふみきり、ここに教団が成立いたしました。わたくしどもはこの教団の成立と存続において、わたくしどもの弱さとあやまちにもかかわらず働かれる歴史の主なる神の摂理を覚え、深い感謝とともにおそれと責任を痛感するものであります。

「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。

しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。

終戦から20年余を経過し、わたくしどもの愛する祖国は、今日多くの問題をはらむ世界の中にあって、ふたたび憂慮すべき方向にむかっていることを恐れます。この時点においてわたくしどもは、教団がふたたびそのあやまちをくり返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日にむかっての決意を表明するものであります。

1967年3月26日 復活主日 日本基督教団総会議長 鈴木正久

※八ヶ岳教会では、毎年8月15日敗戦の日直前の主日礼拝で、この「戦責告白」を唱えています。

日本基督教団総会議長によるこの歴史的告白を、同教団に属する教会として自らのものとし、キリスト者としての戦争責任を自覚する機会にしています。